

チライヨム Vol.18 2019年3月31日発行 発行責任者「佐野強」(株式会社明香社) 企画・編集・デザイン：佐野明香同書房

Vol.18
2019.3

チライヨム

チライヨム



透き通るような筆使いで描かれる、そのキャラクターは「ワニ」。
みやざきひろかず先生が手がける絵本の主人公「ワニくん」は、
デビュー作『ワニくんのおおきなあし』（一九八五年初版、BL 出版）
で生まれました。

以後、続編が 12 作。どの作品でもワニくんは、かわいいだけで
はなく、考え、ため息をつき、でも行動し、ささやかな幸福を見
いだします。ワニくんの人生（ワニ生!？）は、山あり谷あり（そ
れも結構ハード!）ですが、マイペースで乗り越えます。

「ま のんびりやるさ……」*

大人の心にもじわじわとしみてくるワニくんの言葉。

「こんなにしあわせなワニがどこにいていうんだい」*

人生をいとおしむ方法をさりげなく教えてくれます。

そんな素敵な絵本の世界を創造するみやざき先生に、

ほんの少し、創作の秘密をうかがってみました。

*『ワニくんのえにつき』（BL 出版、1992 年）より

取材・文 伊藤享子（奈良県立図書館情報館）

Interview

えほんさっか
みやざき

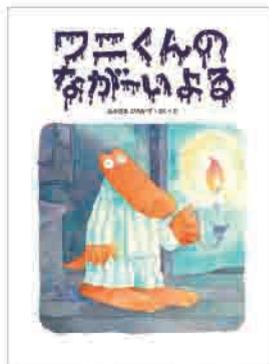


『ワニくんのおおきなあし』
みやざきひろかず作・絵（BL 出版、1985 年初版）

ひろかず



『ワニくんのえにっき』(1992.7)



『ワニくんのなが〜いよる』(1991.7)



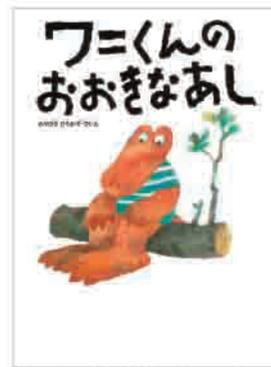
『ワニくんとかわいい木』(1990.6)



『ワニくんのレインコート』(1989.6)



『ワニくんのめざましどけい』(1988.1)



『ワニくんのおおきなあし』(1985.12)

みやざきひろかず先生 最初は会社のデザイン部に所属していました。デザインは専門的には勉強してこなかったので、正直あまりできなかつた。でも、できることはなんでもやりました。

イラストが圧倒的に評判良くて、ある時、メーカーにプレゼンテーションをすることになった絵本に、僕が絵をつけることになった。残念ながら企画は通りませんでした。その時「絵本作れそう！」って思ったんですね。会社は二年で辞めて、フリーでイラストレーションの仕事をしていた時、当時、大阪の千里にあった大阪府立国際児童文学館（二〇〇九年閉館、二〇一〇年大阪府立中央図書館国際児童文学館として公開）の開館記念で「ニッサン絵本のグランプリ」というコンクールの募集広告を目にした。これは出さなくっちゃ、って思ったんです。

一作目でいきなりグランプリに。

『ワニくんのおおきなあし』（一九八五年初版）です。

昔からワニのイラストをよく描いていて、それでワニを主人公にしよう。で、五月ぐらいから考え始めたのですが、お話が浮かんだのは八月。三カ月ほど毎日空振りでした。絵本の中に、ワニくんが洗濯機に足を浸けて小さくしようとするシーンがあるのですが、ある夜、布団に入った時、その場面がビジュアルで浮かんで、続けてページをめくるようにパタパタとお話全部ができた。一瞬でひらめいたのですね。次の日から、ダーって書き始めて一気に仕上がりました。

降ってきた？

そう言うとかっこいいんですけど。んー、そうですね。自分でもよくわからないところ。方法論みたいなのがあれば苦労はしないんですけどね。

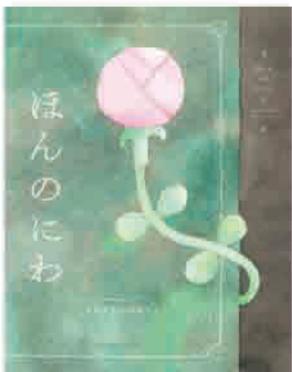
以前にインタビューしたある作家も「起承転結が突然一秒で降ってくる」と言っておられました。

ワニくんシリーズ

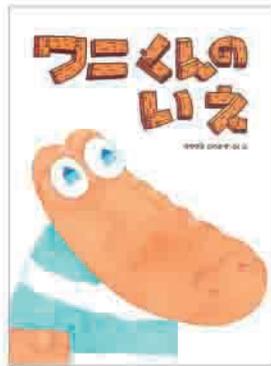
みやざきひろかず 作・絵 BL 出版 1985 年～

『ワニくんのおおきなあし』（BL 出版 1985 年初版）は、『第 1 回ニッサン童話と絵本のグランプリ絵本大賞』受賞作で、みやざき先生が絵本作家として確かに歩み始めることになった作品。続いて『ワニくんのめざましどけい』『ワニくんのレインコート』『ワニくんとかわいい木』『ワニくんのなが〜いよる』『ワニくんのえにっき』『ワニくんのひるねの木』『ワニくんのむかしばなし』『ワニくんのイス』『ワニくんの T シャツ』『ワニくんのふしぎなよる』『ワニくんのアップルパイ』『ワニくんのいえ』と、ワニくんシリーズは現在 13 作。

みやざき・ひろかず ■1951 年、奈良県に生まれる。北海道教育大学札幌校特設美術課程卒業。デザイン事務所勤務の後、スペインの風刺画家 / フェルナンド・ピュイグ・ロサード氏の絵本「地球家族」に刺激を受け、水彩画による絵本作りを始める。「第 1 回ニッサン童話と絵本のグランプリ」に応募した『ワニくんのおおきなあし』で絵本大賞を受賞。これを契機に絵本作家として創作活動に入る。2005 年より奈良県生駒市在住。



近刊『ほんのいわ』(偕成社 2018)



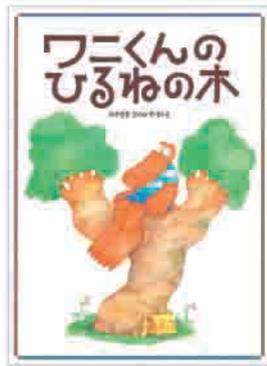
『ワニくんのいえ』(2011.7)



『ワニくんのイス』(1995.11)



『ワニくんのむかしばなし』(1994.8)



『ワニくんのひるねの木』(1993.7)

そうやろと思います。積み上げて積み上げて、という創作もあると思いますが、だいたい皆一瞬なんですよね。肝心なところはね。これ、なかなか説明するのが難しいんです。以前に「脳は何も考えていない時にひらめくもので、使っていない時も、ものすごい働いている」って聞いたことがあるのですが、僕も三カ月考えて、もうええわーってなった時思いついた。隙間を作った時のほうが脳はキャッチするのかな、とか。よくわからないですけどね。

ご自身で不思議な体験をされたことは？

あるんですよ。ヨガをしていて、ある時、先生の指導でヨガの呼吸法をいつもより長く続けたんですね。すると翌朝、幸せでしょうがない感覚いっぱい目覚めて、しかも幸福感が丸一日続いてね。次の日目覚めたら元へ戻っていましたが、できれば続いて欲しかったなーってこの体験のおかげで今まで十数年ヨガを続けることになりました。

ワニくんが伝えたいことは？

ワニくんは「ま、いいか」って思えるのがテーマと言えるかな。ワニくんは「ツイテナイ」と言いながら、結構幸せに暮らしている。ツイテナイの本気度がどこまでなのかはちょっと微妙ですが(笑)。今の子どもたちは大変な状況に置かれている気がするのですが、ワニくんの「ま、いいか」「なんとかなるさ」というのが伝わればいいかなと。

図書情報館のスタッフ何人かに、ワニくんシリーズの中で好きなのはどれか聞いて見たら、一番人気は『ワニくんの不思議な夜』でした。

ワニくんが宇宙人と遭遇するお話ですね。僕も昔からUFOとか宇宙人が出てくるお話が大好きで。一回、富雄(奈良市)のほうでUFOが出るという話を聞いて、見に行ったことがあります。その時不思議な物体を見たのですけどね。



近刊『パウルのスケッチブック』

BL出版(2018.10.10)

パウルはおしゃべりが少し苦手。何か言おうと思っても、言葉がうまくできません。みんなに誤解されることも多いパウルですが、大好きな絵で伝えたいことがいっぱいあって……。できないことがあっても、好きなこと、得意なこと、自分を表現するパウルと、そんなパウルをあたたく見守り、自然に受け入れる家族や友だち。おたがいが相手を幸せにしていることを描いた、やさしい作品です。



ワニくんのアップルパイ(2009.2)



『ワニくんのふしぎなよる』(2002.8)



『ワニくんのTシャツ』(1999.7)



『トシヨカン/クリスマス』(2018.12.15-16)のーコマ。星のオーナメントは奈良の椅子張り工房「宇宙椅子」と奈良のギャラリー「日+月+星(サン・ムーン・スター)」が企画&制作。無数の星のクッションでエントランスが飾られた(写真左)。右写真女性のかぶりものは「ツリーヘッズ」。こちらも宇宙椅子と日+月+星による合作。



企画展示「絵本作家 みやざきひろかず展」(2018.10.23~10.30、奈良県立図書館2F エントランス) みやざき先生の絵本作品約50冊と、新刊『パウルのスケッチブック』(BL 出版、2018.10)の全原画の展示を行いました



ナラヲヨム Vol.18

- 1 Interview
えほんさっか みやざきひろかず
- 7 もくじ
- 8 奈良でゲストハウスをはじめ。
・ゲストハウス古白(奈良市)
・and smiles hostel(奈良市)
・三奇楼(吉野町)
・B&B SEIKOKUJI(吉野町)
- 23 一かけ継ぐ色— 藍に染める
宇陀市室生「笠間藍染」井上加代さん

ナラヲヨム Vol.18

発行
2019(平成31)年3月31日

企画・執筆・撮影・編集・デザイン
奈良県立図書館
奈良市大安寺西1-1000
TEL. 0742-34-2111
FAX. 0742-34-2777

発行責任者
乾昌弘(株式会社明新社)

印刷
株式会社明新社
奈良市南京終町3-464
TEL. 0742-63-0661
FAX. 0742-63-0660

題字
紫舟

UFOですか！ まるで絵本みたいな展開です。
絵本に共通することですけど、お話を絵本にしてしま
うと、どんなことが起きて読む人の元にすんなり入っ
ていくのですね。絵本でなければできない世界観とい
うのがあります。奇想天外なことを描いたからって、あり
えない！って怒る人はいません。
僕なんかは時代的に絵本で育ってはいないのでね。
だから、どんな絵本が良いか正直わからないのです。でも、
逆にそれがよかったのかもしれない。刷り込みがないの
で、下手に影響を受けていると、作れないって思っ
ましたかも。絵本は本当に不思議やなって思いますね。
読み方も人それぞれですし。
今後もマイペースで絵本は作り続けられますか？
そうですね、作れる限りは作りたいですね。やりたい
気分のうちはやりたいと思います。でも、あんまり自分
に鞭打つのはどうかなって思ったり(笑)。わからない
です。明日のことは。



絵本にちなむマーケット「えほんのおうち」(2018.10.27&28)の初日には、みやざき先生が会場、みやざき先生による絵本の読み聞かせ(写真左)とサイン会(写真中&右)を開催しました

Nara City

ゲストハウス
古白 境祐希さん



and smile hostel
松井美紀さん (右)



Yushino
cho

移住体験スペース
ゲストハウス 三奇楼
上市まちづくりの会リターンズ



B&B SEIKOKUJI
長谷政和さん



奈良で ゲストハウスを はじめる。

Welcome
to
visit Nara!

全国で増加し、身近になりつつあるゲストハウス。既存建築のリノベーションも多く、古くて新しい存在となっています。そして今、宿泊客へのもてなしだけでなく、その地域に暮らす人や文化の魅力をも、身近に知ることができる場となる例も増えてきました。そこに行けば、見慣れたはずの景色が違うものに映るかもしれません。いうなれば、日常の中の非日常。そんな空間を作り出している個性的なホストを訪ねました。

©2017年12月～2018年1月取材

奈良の文化サロンを目指して
ゲストハウス古白

境祐希さん

文・写真 平井梨絵（奈良県立図書館情報館）



website <http://nara-kohaku.com/>
facebook <http://ja-jp.facebook.com/n.gachikou/>
instagram <http://www.instagram.com/g.kohaku/>

ならまちに溶け込む
趣のあるしつらい



ならまちの元興寺小塔院に隣接する、「瓦屋根に白壁という清澄な佇まいの「ゲストハウス古白」は、境祐希さんが三年前に開業しました。

境さんが自ら壁を塗った一階の共有スペースは、漆喰が光と音をやわらかく吸いこむからか、時間までゆっくり流れているよう。木製のテーブルやイス、仏教美術や民俗学関係の本が並ぶ本棚など、どれもシンプルながら上品な存在感があり、場によく馴染んでいます。

ゲストハウスを選んだ理由

古白では月に一度、宿泊者を対象に、講義とお寺への参拝がセットになった「仏像講座」を開催

しています。そもそもゲストハウスという形態を選んだのは、生活の中に生きている仏像や、奈良の文化を伝えたい想いがあったからだそうです。

修学旅行で訪れた東寺・五大明王像との衝撃的な邂逅をきっかけに仏像に興味を持ち、仏像が身近にある土地で学びたいと、地元埼玉から奈良の大学へ進学された境さん。ただ、文化財学科で美術史を学ぶ傍ら、四国八十八ヶ所を巡るお遍路や、金峯山寺の山伏修行へも行っていた当時は、今と違い、仏像を本来の文脈や生活から離れて学問的に探求することに懐疑的だったとか。

「博物館の学芸員にも興味はありましたが狭き門で。とはいえお坊さんになるほどの信心はない。ゲストハウスは今までの『観光』と違い、生活の中にあるところがいいと思うんです」

最近は一泊二日で多くの寺院を巡る仏像合宿も開催。「奈良の文化を伝えたい」という想いをさまざまな形で実践されていることに感心すると、返ってきたのは意外な答えでした。

「伝える」ことを一旦手放して

「あくまで極論ですが、伝えるというのは無理だと思いました。その人の感情が伴わないと難しいことなんだと」

そう思い至ったエピソードが。有無を言わせないほどに素晴らしいと思う仏像へと友人を連れて行った時、彼から発せられたのは「カビくせえ」の一言だったそう。

「(相手に)ある程度の素地や知識があって、初めて相手の心が動くのかもしれないと思いました。ただ、解説の仕方が本質とかけ離れてしまうと嘘になるので、バランスは今も考えながらやっています。自分が伝えたいことを言うのではなく、相手に合わせて解説を変える対機説法ができたらと」

取材日は仏像講座に参加し、翌朝近くの徳融寺へ。豊富な知識と説明の巧さもさることながら、こちらのペースや気持ちに添うような境さんの振る舞いには安心感を覚ええました。子安観音の安らかな佇ま



いを前にして、昔の女性たちもここへ来て祈っていたかもしれないと当時に思いを馳せるひとときは、境さんの言葉にもつながります。

「奈良の仏像や行事に根付く思想や祈りを知ることによって、心が楽になるかもしれないと思うんです」

文化人も集う社交場として

古白がオープン当初から目標としてきた旅館があります。奈良市登大路町で大正期から平成七年まで営業し、會津八一をはじめ、和辻哲郎や小林秀雄も宿泊するなど、文化人の社交場として名を馳せた日吉館です。お金のない学生も世話した女将・田村



奈良市

西笹鉾町

奈良と世界をつなぐ

and smiles hostel

松井美紀さん

文・写真 小出利恵（奈良県立図書館情報館）

よのさんの存在もあり、建築・美術・歴史・文学などの研究者が集い交流を深めました。

その日吉館へ近づくように、一階を喫茶店として宿泊者以外にも開く計画が。

「昔の喫茶店って、知的好奇心のある人が集うサロンみたいな場だったと思うんです」

境さんとの会話と芳醇なコーヒーを目当てに立ち寄れるようになるのはなんとも嬉しい限り。宿泊せずに参加できる企画も視野に入れているそうです。時にはそこで面白い出会いがあるかもしれません。

喫茶開業と共に、屋号も「琥珀」から「古白」へ。「奈良に移住して一〇年ほど経ち、少しずつ奈良の歴史や営みが見えてきました。新しいお店では外からの視点を忘れることなく、歴史や営みを漂白するのではなく、古を重ねた白を心に奈良の地で根付いていきたいと考えています」

奈良の生活に根ざす古くから続くものを大切にしながらも、しなやかに深化していく古白の、今後の展開に期待が膨らみます。

ゲストハウスへの 苦手意識を変えたい



メーカーの営業職として海外のパートナーに向けたレセプションやプレゼンを担当するうちに、人をもてなすことが性に合っている自分を発見した松井美紀さん。ある時、海外からのお客様を家に泊めた体験が、ゲストハウス開業への後押しとなりました。

「その方は日本語がわからず、一方で私の母は英語が苦手。でも、二人とも少しずつ単語だけで会話をしていた。初めは私を通訳にしていたけれど、途中でわざと席を外してみたんです。それでも二人とも話を続けていって、母が説明の難易度が高い歌舞伎の話まで始めた時は、もう感動でした」

松井さん自身、学生時代の留学経験から始まり、語学習得に長い時間を要しました。それだけに、伝えたい気持ちの強さが言葉の壁を崩していく様子は、大きな衝撃でした。それが《つながりを生む場所を作りたい》という想いを生んだのです。

とはいえ、見知らぬ人と関係性を築くのが苦手な人は多い。そこで、女性専用にしてはどうかと思いに至ります。

「女性同士ならコミュニケーションも取りやすいし、ハードルが高いと思っていらっしゃる方にも挑戦してもらえると」

想いを実現するために必要な、冷静な分析がそこにはありました。

長く続けていける場所に

開業にあたってこだわったことを伺うと、やや意外な答えが返ってきました。

「築九〇年の古民家は、偶然見つけた物件です。水回りなんか使いやすい状態だったし、建物には特にこだわりませんでした」

確かに古びた風情はありつつも、宿としての快適さはしっかりしています。代わりに力を入れたのは、情報整備とブランディング。ウェブサイトには宿泊や観光にあたって必要な情報はもちろん、自分の真摯な気持ちを伝えるページもあり、「ハー



も、頻繁に見かける光景だそう。こうした交流が、松井さんの中にもう一つの特徴を生み出すきっかけを作り出しました。

「この町の方々に奈良のいい所をたくさん気づかせてもらいました。だからうちも、宿泊だけでなく《奈良のスキル》を伝えてもらえる場所にもしたいと思いました」

website <http://andsmiles hostel.com/>
facebook <https://ja-jp.facebook.com/andsmiles hostel/>
instagram https://www.instagram.com/matsui_mikiss/

「ドルを下げたい」という想いが伝わってきます。デザイナーに制作依頼したインパクトある宿のロゴも、この看板を掲げていくという本気の姿勢がわかるものに仕上がっています。

「このエリアにしたのは偶然だったけれど、奈良きたまちの方々には本当に温かく迎え入れていただきました。ゲストを連れて地域への行事に参加してもいいよと気軽に誘ってもらって、それがゲストにもすごく喜んでもらえることばかりで。だから、ローカルな体験してもらええる拠点であり、地域にも新しい風を取り入れられるような活動を長く続けていきたいんです」

地域と関わることへの影響と責務を踏まえた、強い言葉がこぼれ出しました。

旅の思い出と、 たくさんのおsmiles



奈良きたまちは長く暮らしている住人が多く、おかずやお漬物をおすすめ分けしあうといったこと

こうして生まれたのが、女活と呼ぶワークショップです。内容は料理や美容に関するものが主ですが、男性の参加もオッケー。柿の葉寿司作りといったローカル色の強いものや、味噌づくりなど日常に溶けこむ内容のものも多く開催されます。

「お母さん、今年はある(味噌)作ってないの?」
て、帰省した子どもが言うの」

味噌づくり講師の言葉は、松井さんが女活を通してつなげていきたいことをよく表していました。

あとは知ってもらうだけ

「せっかくなのいいコンテンツにうまく人を集められなかった時は、講師の方にも申し訳なくて……」
ゲストハウスと女活の双方で苦労するのは、やはり集客。昨年開業したの and smiles hostel の知名度はまだまだのようです。

「けれど、大変なのはそこだけ。あとは来てくれた方に全力でおもてなしするだけです」

そう話す松井さんからは、しなやかな力強さがひしひしと感じられました。



吉野町

かみいち
上市

人と人、人と地域をつなぐ《ハブ》
移住体験スペース・ゲストハウス

三奇楼

文・写真 加藤 由美 (奈良県立図書館)

古くて新しい
おばあちゃん家



奈良県南部の吉野町上市にある三奇楼は、元料亭旅館の建物を地元で建設会社を営む南達人さんが買い取り、改装したゲストハウスです。南さんを筆頭に地元の有志で結成した《上市まちづくりの会リターンズ》が中心となり、完成させました。

「町の景色を残しながら、吉野材を使って地域の魅力をPRする場所として、また同時に里帰りする場所、地域を盛り上げていく拠点として活用したい」

南さんが話すとおり、建物内には吉野材がふんだんに使われ、とても落ち着ける空間。職業訓練校と近畿大学建築学部の子生たちの協力で復活させた展望デッキも、吉野材が敷き詰められた堂々たるもの。管理人の一人、三船治子さんは「おばあちゃんの家泊まったみたい」とよく言われるのだとか。確かに周りは静かで、時間がゆったりと流れ、まさにおばあちゃんの家に戻ってきたよう。三船さんは言います。

「来てくださった方を丁寧におもてなしたいので、大きな広告サイトには登録していません。口コミでも興味を持ってもらえたらと思っています」
こういった一人一人を大事にする姿勢が、三奇楼を居心地の良いゲストハウスにしている理由ではないでしょうか。お気遣いもさりげなく、とてもリラックスできます。

さまざまなイベントで交流

取材日は、敷地内にある蔵を活用した不定期開催のイベント、蔵カフェ・蔵ライブラリーが開かれていました。蔵カフェは、写真家・ウェブデザイナーの山本茂伸さんがボランティアでマスターをされています。そのカフェとのコラボ企画である蔵ライブラリーを運営するのは、吉野町地域おこし協力隊の笹部夏穂さんと安田奈央さん。二人は、コミュニティ活性化や読書推進の活動をする場として人が集まることのできる空間を探し、蔵カフェとコラボすることを思いつきました。「本と人、人と人がつながる

地域活性の拠点として

「以前はこういう場所がなかったの、地域活性の拠点ができて嬉しい」。

そう話す蔵カフェマスターの山本さんは、大淀町

左写真 / (左から) 笹部さん、安田さん



ことのできる場所にしていきたい」と、毎回違うテーマを設定し、それに沿った本を地域のいろんな方から借り受け、蔵ライブラリーで紹介しています。
三奇楼で行われるイベントは、宿泊者同士、また宿泊者と地域の方が交流できるいい機会となっています。たとえば食のイベントでは地元の料理が並び、吉野の味を堪能できます。出店者も、作る料理を考えたりの出店者のメニューを想像したりするのが楽しいそうで、地域の方にとっても一種の元気の素だということがわかります。三奇楼では、今後ワークショップなども加えながら、さまざまなイベントを続けていく計画だそうです。



それぞれの本に、吉野町の手書き和紙に手書したメッセージが

在住ながら上市の魅力にとりつかれ、《上市まちづくりの会リターンズ》に加わったそう。三奇楼は普段からみんなで気軽に集まれる場になっているそうで、三奇楼のスタッフやリターンズのメンバー、地域の方たちが集まると、次々に新たな提案が出てくるそうです。

「吉野には、人のつながりでボランティアベースでも一生懸命にやる伝統があります。まちづくりが根付いている地域ですね」。

山本さんによると、吉野にはもともと「手伝う」文化があるのだとか。たとえば展望デッキで行われている天体観察イベントを企画したのは、移住者で現役のパラナタリウム解説員。当日は、自らボランティアとして天体望遠鏡を持参し、星空案内をしてくださるそうです。愛する地域を活性化しようと、みんなで一丸となって取り組む様子が伝わってきます。

たくさんの人たちが関わって、さまざまな展開を見せる三奇楼。宿泊だけでなく、イベントへの参加などで、吉野町上市のみなさんの熱い思いに触れてみてはいかがでしょうか。

website <http://sankirou.com/>
facebook <https://ja-jp.facebook.com/sankirou/>

吉野川の眺めがすばらしい展望デッキ



飾り立てないありのままの宿坊

B&B SEIKOKUJI

文・写真 山本 智司 (奈良県立図書館)

吉野町

みまぐさ
南国栖



あえて演出はしないけれど、
真心を込めて



野趣あふれる風景を残す吉野町南国栖にある清谷寺は、二〇一六年三月から宿坊「B&B SEIKOKUJI」を営んでいます。近鉄電車の大和上市駅からコミュニティバスで約三〇分。希望に応じて、車での送迎もしてくれます。建物は、和風建築の二階建て。一階は落ち着いた音のある純和室、吉野川を展望できる二階は、檜の香りに優しく包まれる洋室です。微かに川の音を聞きながら過ごせる空間に、しっとりとした温かさが感じられます。「宿坊用に建物は改装しましたが、その他は普段通りありのままです」と話すのは、担当の

お寺の運営を軸にしつつ

東京の音楽出版社に勤務していた長谷さんは、都会の生活に疲れを覚えたことや実家である清谷寺の将来を考えてUターンし、吉野町地域おこし協力隊に赴任しました。宿坊を始めたのは、今後ますますお寺だけで生計を立てるのは難しくなると考えたから。吉野町は、人口が毎月約二〇人減少している過疎地域なのです。ただ、副業といえども心を込めておもてなしされていることは、Airbnbのゲストコメントからも伝わってきます。「自分にとって良かったのは、宿坊をしたからこそその出会いがあったこと」と長谷さんは語ります。

最も印象に残っている人は、フランス人女優ジュリエット・ピノシュさん。映画のロケが吉野で行われ、主演であるピノシュさんの宿泊先を選ばれたのです。しかも、ロケ期間前半だけの予定を変更し、最後まで宿泊するほどの気に入りようだったそうです。

副住職・長谷政和さん。たとえば、毎日精進料理を食べているわけではないので、朝食は市販のもの。一方、朝夕の勤行は通常の営みなので、ゲストも体験できます。

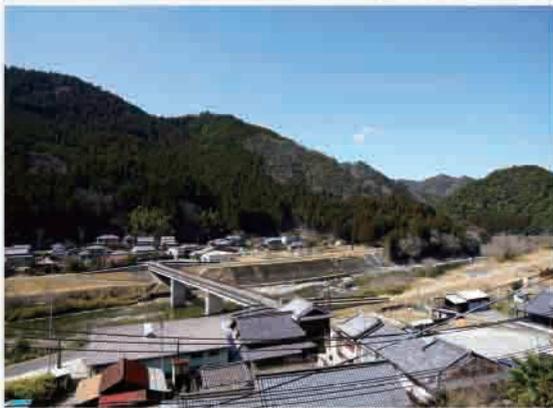
素朴な宿といえるB&B SEIKOKUJIですが、実は外国からの宿泊者が多く、今では約八割を占めています。世界的な宿泊予約サイト「Airbnb」でのゲストによる評価は、堂々の五つ星。長谷さんは、スーパーホストに認定されています。「こんなに来てくださるとは思っていませんでした。外国の方にとっては、観光地化していない普通のお寺に泊まること自体が特別なのかもしれませんね」

たしかに、異国で日常の暮らしに入り込むのはプレミアムな体験。聞けば、都市部の観光地を巡る合間に宿泊される外国の方も多いとのこと。過度な干渉をせず、丁寧に接する長谷さんの振る舞いも、喧騒を離れて過ごしたい旅行者には適度な距離感で心地良さが感じられるでしょう。

website <https://nara-seikokuji.jimdo.com/b-b-seikokuji/>
facebook <https://www.facebook.com/bandbseikokuji/>

「吉野には旅館や民宿、ゲストハウスなどさまざまな形態の宿泊施設がありますが、利用者のニーズは違いますので、みなライバルではありません。それぞれの立場から、吉野の良さを伝えてほしいと思っています」

吉野ビクターズビューローで観光の仕事にも携わる長谷さんらしい言葉です。



写真上 / 2階の洋室
写真下 / 窓の外は吉野川の流れ

人の流れをつくる

「お寺だから」という固定観念にとらわれず、臨機応変にさまざまな新しい価値観を取り込むという意味で、長谷さんは自らを《なびく》というキーワードで表現します。そしてそのためには、自分に余地を残すことが大事といいます。

「あえて目的を明確に設定せず、しかし自分が良いと思うことを地道に続けるつもりです」

清谷寺では、音楽好きの長谷さんらしく「自然豊かなロケーションで本物の音楽との出逢いを」と、ライブイベントを行っています。有名かどうかは関係なく、「この人に演奏してもらいたい！」と思うアーティストに出演を交渉し、駐車場の確保や古書店の出店依頼などもすべてこなすのだとか。今後は、本や仏教哲学に関するイベントも視野に入れているそうです。

山と川に囲まれ、凜とした空気が漂う中でのイベントは格別なもの。さらに、ゆったりと時間が流れる宿坊でその余韻に浸れば、忘れられないひとときになるのではないのでしょうか。

藍に 染め る

宇陀市室生
笠間藍染
井上加代さん

— かけ継ぐ色 —

訪れた転機

加代さんが、奈良県伝統的工芸品(※)に指定されている笠間藍染の伝統工芸士として認定された二〇一二年頃から、状況は少しずつ変わっていきます。テレビの取材をきっかけに、仕事の依頼がぼつぼつと入るようになります。

「製品を納めて喜んでくれた相手を見たときに、これならやっていけるかなど。今もまだ不安やねんど、少しずつ」。自身の気持ち確かめるように、ゆつくりと言葉を織いでいかれます。

ただ、その後も決して順風だった訳ではありません。一時は藍の様子がおかしくなり、元気な状態のときは藍糞に浮かぶ藍の花も消えました。

「あのときはもうだめかと思いました」。藍糞を見ながら当時を振り返る加代さん。

※奈良県の風土と歴史に育まれた伝統的な技術または技法を用いて製造されている工芸品が奈良県伝統的工芸品に指定され、その維持・発展に努めている製造者は伝統工芸士として認定される。

カチを作り、藍染め体験も受け入れています。今では服の染め直しの依頼も増えていて、部分的に白くなったスカートや染めたときには相手がとても喜んでくれ、「こういう人がいるなら」と仕事を続けていく気持ちの後押しになったそうです。取材時は、自由に作ってほしいと依頼を受けた大型暖簾の制作中で、生地や模様などあれこれ考へて作っていることを話す姿からは、作る過程を真剣に楽しんでいる様子が伝わってきました。

藍染めという技術

日本の伝統的な藍染は、中国渡来の蓼藍(たであい)という植物を自然発酵させた染(ぞめ)、裏(うら)で石灰または木灰などと再び発酵させ、水に溶けるようにする「藍建て(あいたて)」を行うのが主流です。藍はいわば「生きもの」。同じ日



一旦外に出てすぐ山の水は、全身がはっとするほど冷たく、冬の作業の辛さを思い出します。再び藍糞に浸し、水ですぐと、濃い藍の色が現れました。折りたたんで模様を付けたハンカチは、広げると藍に白い星の花が咲き、歓声が上がりました



今回の取材ではハンカチの体験染めをしました。絞りなどの下準備をした後、藍糞の前に膝をつけて静かにハンカチを入れると、生あたたかい滑らかな藍の感触が。そこで初めて藍の、濃厚で重さのある独特の香りが立ち上りました。「子どもはくさくさいと言うんですよ」と笑う加代さん。糞から引き上げるとハンカチは緑がかった薄藍に

藍の材料である染(ぞめ)の仕入れでお世話になっている方を頼りに本場徳島まで教えを請いに行き、藍の命はなんとか繋がりました。藍部屋は藍の発酵を助ける菌を絶やさないよう、明治初期に建てられた当時のまま。どこどころ剥がれ落ち、温度管理のために焚く炭で燻(くわ)され黒々と艶のある壁は、重厚な雰囲気を出していました。藍の調子を見極めて染め上げるには、繊細な感覚を要するイメージがありますが、大きな裏で材料を攪拌(かきまぜ)する藍の仕込みや、染め上げるまでの水ですぐ工程は重労働。すぐいで使う山の水は、実際に手を浸すと肌を刺す冷たさで、冬場はしんどいですねと声をかけると、「できるだけ昔のやりかたでと思っただけ」との答えが返ってきました。今はご主人と加代さんの二人で、日々の仕事を一つ一つ熟(じゆ)しています。

加代さんの工房では、型や絞りなどで染めた暖簾(のれん)やタペストリー、ストールやハン

に同じように染めても、出るのは微妙に違う色で、納得がいく色に染まる事はめったにありません。富夫さんでも年に一、二度だったとか。

「藍染めはムラなく染めるもんだよと思っっている人が多いし、わたしもそれに応えてムラなく染めたいという気持ちがあるんです。でも、ムラがいいねっという人も確かにいます。お義父さんがムラは藍染めの特徴だと言(い)うてたんやけどね、それもほとんどと思うんですよ」。

ムラを、天然染料に特有の濃淡のあわいによる景色として愛でるか、均一さを求めて否定するか。一つ一つの仕上がりの良し悪しはあるにせよ、何が美しいかという感覚が、人の育つ環境や経験に追うところが大きいならば、天然染めを見る機会自体が減少している今の状況も影響しているのかもしれない。

加代さんが染めたハンカチ。このほかに型や絞りで染めた暖簾やタペストリーなどを制作しているほか、服の染め直しも受けています。



暮らしや想いをかけた色

笠間藍染という昔から連綿と繋がれてきた技術を継ぐとともに、先代とは異なる絞りの技法を取り入れるなど、加代さんは新しい風も吹き込んでいます。ただ、技術があってもその時々で現れる色が異なるのは、人の手から離れて作用する何かがあるから。それが藍染の面白さでもあるそうです。

笠間藍染

天然藍建（本藍建、天然発酵建など呼び名は複数有）と呼ばれる、葉（すくも）を石灰などと自然発酵により還元させて染液を作る、伝統的な製法を用いています。藍の染液に、糸や布を漬けては空気にさらし酸化させることを繰り返して、藍色を定着させます。その後、水ですすぎ、自然乾燥をして完成。型や絞りをを用いて模様をつけることも。井上加代さんの工房がある下笠間は、かつては「笠間の紺屋」として名をはせるほどだったとか。現在、天然藍建を守る紺屋は全国でも数少なくなっています。

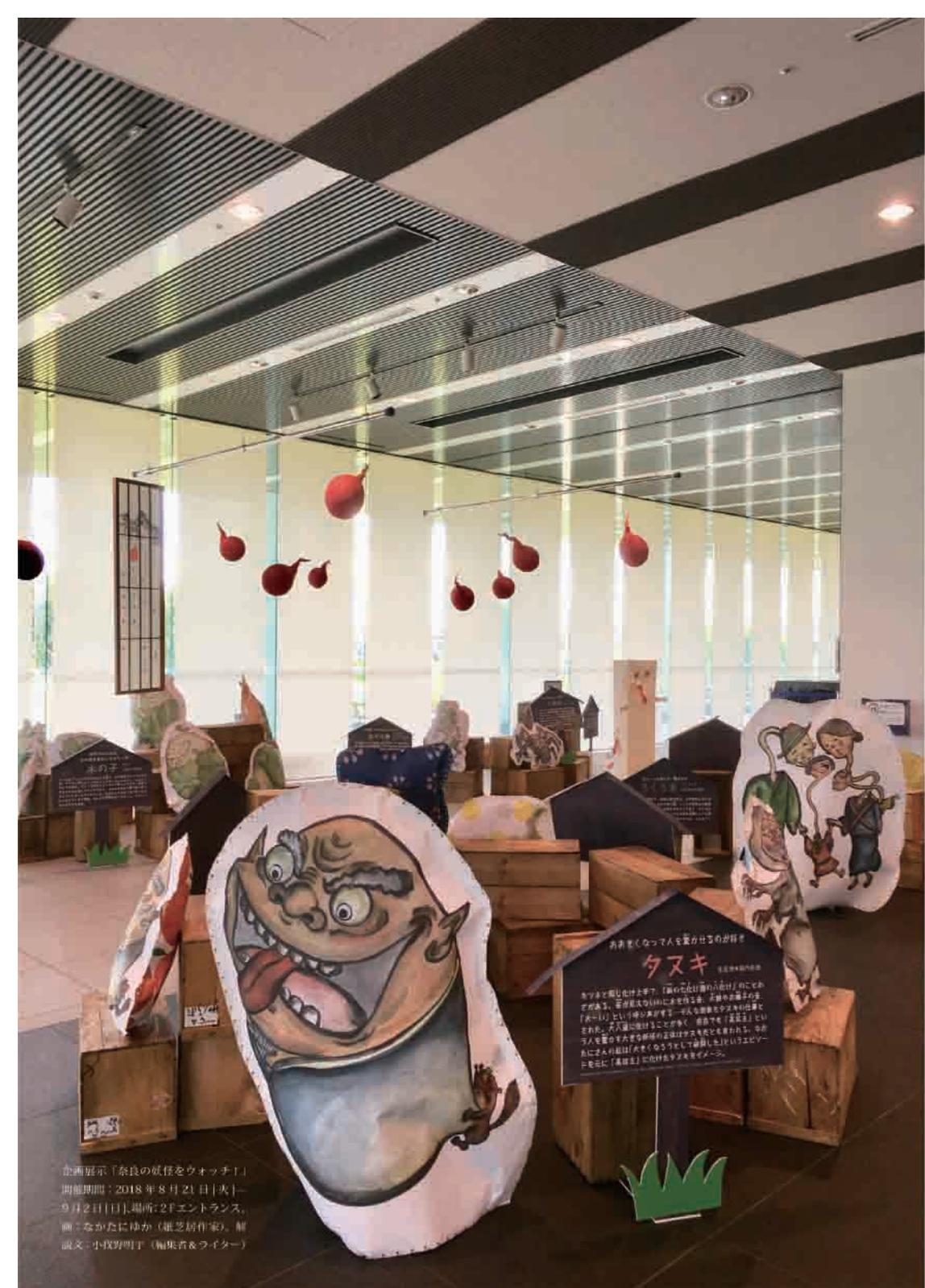
「お義父さんみててね」。心の中で加代さんが度々口にする言葉は、富夫さんだけでなく、笠間藍染に携わってきた人たちにも向けられている気がします。濃紺に染めるには、初めから新しく強い藍に浸すのではなく、古く弱い藍から順に「色をかけて」いくそうです。加代さんが染めた布を見ていると、現れた色には、笠間の四季や暮らし、日々のしんどいことや嬉しいことも一緒にかけ合わされているように思えてきました。

今後のことを尋ねると、しばしの間の後、笑って答えてくれました。

「藍と機嫌よう、うまくいい色が保てたらなあ、それだけです」。



井上加代（いのうえ・かよ）
奈良県大宇陀町（現宇陀市）生まれ。長く和裁の仕事に従事。2002年から藍染めを始め、2012年に笠間藍染の奈良県伝統的工芸士として認定。



企画展示「奈良の職任をウォッチ」
開催期間：2018年8月21日[水]～
9月2日[日]、場所：2Fエントランス。
画：なかにゆか（雑誌房作家）、解
説文：小沢野明F（編集者&ライター）